



学長のラトビア大使館、クロアチア大使館訪問に同行して

池田裕子

(学院史編纂室)

4月27日に駐日ラトビア共和国大使館と駐日クロアチア共和国大使館を訪問される井上琢智学長に同行し、両国大使との会見の場に同席しました。その時の模様をご紹介しますと思います。

★大使館訪問に至るまで

同行が決まったのは4月上旬でした。以来、私は何とも言えない不安を感じるようになりました。そもそも、外国の駐日大使館を訪問し、大使にお会いするという機会は滅多にあることはありません。しかし、ラトビア大使館に関しては、2008年3月の初訪問以来、4度もお訪ねしていますし、それ以外の場でも大使と言葉を交わす機会が何度もありました。初めてお目にかかった時は確かに緊張しましたが、長年知りたいと願っていたイアン・オゾリン(Ian Ozolin、90年前の教師)の国の方にお会いできる喜びと好奇心の方がはるかに強く、漠然とした不安を感じるということはありませんでした。今回は単独ではなく、学長と一緒に目にかかるということが私を不安にさせたのです。

私にとって初訪問となるクロアチア大使館のことを考えると、不安な気持ちは一層膨らみました。その原因は、まず言葉です。大使館では恐らく苦手な英語を使わなければならないでしょう。その上、自分自身がクロアチアのことを何も知らないということも不安の大きな一因でした。

このような気持ちを抱えての訪問は先方に失礼ですし、自分のためにもなりません。未知の世界に足を踏み入れるというのは、本来とっても楽しいことのはずです。今さら語学力はどうしようもないので、その他の不安を解消し、ワクワクした気持ちで当日を迎えようと心に決めました。

そうした折り、海外でのお仕事の経験豊富な安部隆雄さん(経済昭34)から頂戴したアドバイスに心救われる思いがしました。「学長のお伴で大使館訪問は大役のようですが絶対ダイジョーブですよ。特別な依頼とかむつかしい協議でない表敬訪問(courtesy call)ですから、主役はご自分のつもりで気軽にご訪問ください…。主役は自分ということは、たとえ学長と一緒にあっても、自分一人で訪問するのと何ら変わりはないということです。そう考えると、気持ちがスッと軽くなりました。

次に、何も知らないクロアチアと自分自身の関係を考えてみました。グリークラブが90年にわたって大切に歌い続けてきた「U Boj」のことは、軽部潤さん(法学昭28)が『関西学院史紀要』第16号にお書きになった「名曲『U Boj』のルーツと関西学院グリークラブ」を読んで感銘を受けていました。関西学院を3度訪問されたドラゴ・シュタンブク(Drago Štmbuk)前大使とは、昨秋ラトビア大使館で開催されたレセプションでお目にかかりました。実は、その前年のレセプションでも大使の姿をお見かけしていたのですが、声をかける勇気が出ませんでした。そのことを軽部さんにお話すると「大使は大変気さくな方ですから、声をかけたらきっと喜ばれたはず。次の機会にはぜひ声をかけてください」と言われました。さらに、私が関西学院から来たことに気付かれた宮内庁の式部官が「関西学院と言えば『U Boj』ですね。クロアチア大使はまだお見えになっていないようですが、間もなく来られるでしょう。お見かけしたらご紹介しましょう」とお力添えくださったのでした。

こうして、シュタンブク大使に初めてご挨拶することになりました。「Kwansei Gakuin」の響きを耳にされた瞬間、魔法のように大使のお顔が輝きました。そして「私は関西学院を3度も訪問したのに、どうして誰もあなたを私に紹介してくれなかったのだろう?」、「関西学院とラトビアの関係は?」、「あなたはどのようにして関西学院の歴史に詳しいのか?」等、矢継ぎ早に質問を受けました。ヨーロッパ各国大使、音楽関係者、国会議員、合板関係企業の方々が大勢出席しておられる大変な賑わいの中、英語で会話を続けるには、恋人同士のように身体を近づけ、互いの耳元に口を寄せねばなりません。大使のネクタイを間近に眺めながら「これがクロアチア人のクラヴァットか」と、私は遠い過去の記憶を蘇らせていました。

それは、中学2年の時のフランス語の授業でした。ネクタイのことを「クラヴァット(une cravate)」と言うと教わりました。クラヴァットとはクロアチア人のことで、フランス人はクロアチア人の習慣を取り入れてネクタイをするようになったからこう言うのだ、との説明でした。当時、世界地図の中にクロアチアという国を見つけることのできなかつた私は「クロアチア人って一体どんな人？」と不思議に思ったものです。

こう考えると、私がクロアチアを意識してから30年以上経つにもかかわらず、その国や人のことを知ろうとしないまま年月を重ねてきたことに気づき、愕然としました。そこで、大使館訪問の前日、クロアチア料理を味わって、少しでも近づいておきたいと思いました。

日本で唯一のクロアチア料理のレストラン「ドブロ(Dobro)」は、JR 東京駅八重洲南口から徒歩数分の所にあります。クロアチアの大きな国旗が出ていたのですぐにわかりました。正午前に入店したため、一番奥の席で店内の様子を眺めながらゆっくり食事することができました。正午過ぎから次々に席が埋まって、ほぼ満席になりました。私が選んだのはクロアチアンランチコース(自家製パン、オードブル、メインディッシュ、デザート、紅茶、1,800円)で、その日のオードブルはタコを使った野菜サラダでした。アドリア海のタコもきつとこんな味だろうと思いながらいただきました。メインディッシュは「サルマ」(写真)か「牛ホホ肉の赤ワイン煮」から選ぶよう言われました。サルマとはクロアチア名物のロールキャベツで、日本のものとは全く別物だと聞いたことがあったので、迷わずサルマにしました。確かに未経験の味でした。味の違いは、包んであるキャベツが発酵しているためで、独特の強い酸味がありました。そのまま一口味わったあと、添えてあるマッシュポテトと共に原型を留めないほどよくかき混ぜて、スプーンで食べるよう勧められました。そうすると、かなりまるやかな味に変わりましたが、程よい酸味が食欲を刺激し、大いに食が進みました。一言で表現するなら「癖になりそうな味わい」でした。最後のデザートはロジャータ(オレンジ風味のプリン)でした。



クロアチア料理を堪能した後、地下鉄で国立国会図書館に向かいました。古い英字新聞 *The Japan Advertiser* を調べ、オゾリンが執筆した記事を2本見つけました。震災後、開館時間と利用資料に制限があった国会図書館も、その前日から通常のサービスに戻っていました。新館4階の新聞資料室でラトビアとオゾリンのことを考えていると、すぐに時間が経ってしまいました。

★ラトビア共和国大使館

翌日、渋谷区神山町のラトビア大使館前で経済産業省訪問を終えられた学長と落ち合いました。用意したラトビアンレッド(国旗の色)のポケットチーフを胸に入れていただいてから、大使館の呼び鈴を押しました。

迎え入れてくださったのは日本人女性でした。玄関で靴を脱ごうとされる学長に「段差がありますが、そのままです」と説明して、中に入りました。間もなく、ペーテリス・ヴァイヴァルス(Pēteris Vaivars)大使とオレグス・オルロフス(Oļegs Orlovs)次席が笑顔で現れました。私にとってオレグスさんとは2ヶ月ぶり、大使とは5ヶ月ぶりでした。学長はどちらとも初対面です。名刺交換の後、英語とラトビア語と日本語を交えた和やかな会話が始まりました(こちらが英語で話すと、大使もオレグスさんも英語で対応され、日本語で話すと、オレグスさんがラトビア語に通訳してくださいました)。

今回の訪問の目的は、2008年10月10日に大使が関西学院にお持ちくださったオゾリンに関するラトビアでの調査結果の翻訳(ラトビア語→日本語)が完成し、『関西学院史紀要』第17号に掲載することができた報告と、公表に至るまでのご協力に対する感謝の気持ちをお伝えすることでした。あの時、大使は調査結果を2部お持ちになって、1部をルース・グルーベル(Ruth Grubel)院長に、もう1部を私にいただきました。ですから、前学院史編纂室長であり、現学長の井上先生からお礼を申し上げるのは、厳密に考えれば筋違いだったかも知れません。院長と学長の役割について大使から質問を受けました。しかし、『関西学院百年史』の編纂に関わり、関西学院の歴史に最も詳しい現学長こそ関西学院を代表してお礼を申し上げるのに相応しい人物とも言えるでしょう。学長は、日本にとって大正時



代がどのような時代であったか、また、関西学院の卒業生（田中研治神戸薬科大学教授）に翻訳をお願いできた幸運を説明されました。

大使へのプレゼントとして、学長は古書店で見つけられた『文学部回顧』（1931年）をお持ちになりました。これは、関西学院におけるオゾリンの活躍を現在に伝える唯一とも言える刊行物です。学院史編纂室からは、論文抜刷と神戸のお菓子を差し上げました。

大使は、オゾリンの存在が日本で多くの人に知られるようになったことへの感謝の気持ちを表されました。オゾリンだけでなく、両国交流史上重要なヘルベルトス・ツクルス(Herberts Cukurs)やハンス・ハンター(Hans Hunter)にまで対象を広げて調査していること、成果を日本語だけでなく、一部は英語でも発表していること

に対してもお礼を言われました。ツクルスに関しては、本国でも再評価のための委員会が立ち上がっているそうです。さらに、ラトビア語スピーチコンテストを9月に大使館で開催する予定であることを教えてくださいました。「池田さんは大阪のラトビア語教室で最も優秀な生徒だと聞いています。ぜひ参加してください」と言われ、腰が抜けそうになりました。

嬉しい提案も受けました。前回の講演から間もなく3年になることから、再び関西学院でお話しくさるそうです。それに合わせて、ラトビアで5年に1度開催される「歌と踊りの祭典」の写真展を開催できないだろうかと言われました。2008年に行われた「祭典」の写真パネルを大使館はお持ちだそうです。早稲田大学では2009年3月にダウゼ(Gundars Daudze)国会議長を迎え、写真展が開催されました。私も見学しましたが、迫力ある美しい写真の数々に感動しました。関西学院で開催されれば、多くの人に関心を持ってもらえることと思います。



★クロアチア共和国大使館

こうしてラトビア大使館訪問を終え、昼食をとってから広尾のクロアチア大使館に向かいました。学長の胸のポケットチーフは、ラトビアンレッドから美しいアドリア海の色に変わりました。

学院史編纂室はこれまでクロアチア大使館とのおつきあいはありませんでした。2008年にシュタンブク大使が訪問された時、グローバル院長や杉原左右一学長とはお会いになりましたが、学院史編纂室長がお会いする機会はなかったのです。ですから、私が学長に同行することには戸惑いがありました。関西学院と同大使館との関係は、新月会（グリークラブOB会）によりもたらされたものでした。グリークラブ関係者が長年にわたり名曲「U Boj」のルーツを捜し求めて来られた結果、それがクロアチアの歌であることがわかり、新月会と同大使館との交流が始まったのです。そのおかげで、関西学院大学はクロアチアのスプリット大学と包括協定を締結することができました。「私が長年捜し求めていた心の故郷はこの関西学院とグリークラブにあった」と言われたシュタンブク大使の貢献の大きさを考えれば、何らかの機会に関西学院大学から同大使館を表敬訪問して欲しいと新月会の方々が思われたのは当然のことでしょう。このような経緯から、新学長はラトビア大使館と同じ渋谷区にあるクロアチア大使館を訪問することを決められたのだと思います。

大使館の門扉の前で呼び鈴を押すと、ロックが外されました。部屋に案内して下さった（恐らく）クロアチア人女性が日本語ではなく英語を話されたため、「ここでは英語でお話ししなければならいようですね」と学長も覚悟を決められたようでした。

間もなく、長身で目の覚めるほど美しい女性と若い男性が入ってこられました。シュタンブク大使の後任ミラ・マルティネツ(Mira Martinec)大使と、サニン・ヴラステリツァ(Sanjin Vlastelica)書記官でした。大使は2週間前に赴任されたばかりでした。前任地はアルゼンチンだったそうです。学長は日本への歓迎の意味を込め、花束をプレゼントされました。お目にかかったことのない、立場ある外

国の方にどのような花を選んだら良いか悩みました。クロアチアの国花を調べると、ヴェルビド・デジュニア(見たことありません)、アイリス、小麦が出てきたのですが、どれが正しいのか、あるいはどれも正しいのか見当が付きませんでした。結局、季節感を重視し、花菖蒲(日本のアイリス)とカンパニュラ(花菖蒲と同じ色)と小麦を使って、知的な大人の女性をイメージした花束を作ってもらいました。受け取られた大使は「私の大好きな色です」とおっしゃいました。学院史編纂室からは、京都と神戸のお菓子を差し上げました。お菓子を包んできた風呂敷の柄(江戸小紋)に目を留められると「クロアチアにもよく似た模様があります」と興味深げに手にされました。



大使は、日本人が自然との調和を大切にする国民であることに感銘を受けられたそうです。来日から日が浅いため、まだどこにも行っておられないようですが、「この辺りを歩いただけでも、そう感じます」と言われました。また、この度の震災に対するお見舞いの言葉とこのような困難な状況にあっても冷静で我慢強い日本人の姿に感動したと話されました。これを受けて、学長は阪神大震災の時の様子(関西学院の犠牲者やボランティア活動等)を説明されました。

さらに、シュタンブク大使が3度も関西学院を訪問してくださったこと、同大使のおかげでスプリット大学との協定締結が実現したことに対するお礼を述べられました。そして、関西学院で母国の話をしたいとお考えだったにもかかわらず、その機会のないまま帰任されたことをご説明し、できれば新大使にお願いしたいと申し入れました。それから、前大使にご臨席いただいた新月会東京支部の演奏会にマルチネツ大使をご招待したい、レセプションにもご出席いただきたいとの軽部さんからの伝言をお伝えしました。これらに関して大使から積極的なお返事を頂戴しました。「U Boj」と関西学院の関係について、大使はクロアチア語のウェブサイトを既にご覧になっていて、よくご存知でした。

最後に、大使はクロアチアンワインを学長と私にプレゼントしてくださいました。お暇する前にお尋ねしたところ、日本にはお一人で赴任されたそうです。「27歳の息子がいるけれど、彼はもう大人で、私を必要としないわ」とおっしゃいました。「でも、きっと日本に訪ねて来られるでしょう」と申し上げると、「ええ、それを楽しみにしています」とのことでした。

★大使館訪問を終えて

両大使との会見を無事終えられた学長はホッとされたようです。ラトビア大使館訪問後、ヴァイヴァルス大使の大きさ(人間的大きさ、包容力を含めてのことだと思います)に驚いたとおっしゃいました。「通訳が入ると、その間どこを見ればいいのか戸惑いますね」と言われたので、「私は常に大使を見つめています」とお答えすると、「池田さんは大使のファンだからそれでいいでしょうけれど、私の場合そうもいきません」と笑われました。英語でお話しくださったら通訳など不要なのに…と思いました。クロアチア大使館訪問後は、マルチネツ大使のあまりの美しさに驚いたと正直な感想を漏らされました(この場合の「美しさ」が大使の外見だけを指すものでないことは、ヴァイヴァルス大使の場合と同様です)。私も全く同感でした。とりわけ「クロアチア」とおっしゃる時の美しい響きに魅せられました。シュタンブク前大使は新任地ブラジルでさらに大きな働きをされるでしょうが、魅力あふれるマルチネツ新大使も日本で多くの人に愛され、クロアチアと日本の交流に尽くされることは間違いのないと思います。

今回の経験を通し、自分を知り、相手に関心を持つこと、自身の言葉で語り、相手の立場になって考え、行動することの大切さを実感しました。近頃、関西学院でよく使われる「世界市民」という言葉は、創立者 W. R. ランバスの父の故郷ミシシッピ州パールリバーに建てられた記念碑に刻まれた文から取られたと聞いています。私には、記念碑の文言としては理解できても、その中の一語を取り出して現在の関西学院で使われる場合の意味が今ひとつ理解できませんでした。しかし、「世界市民」の基本が自分を知り、相手に関心を持つことであるなら、これからも心と頭を柔軟にして新しい「世界」に飛び込んで行きたいと思います。好奇心を失うことなく、私ならではの感性を大切に…。